

朝

朝が来ると、太陽がやってきて海岸線を染める。まず紫、次にオレンジ、赤。夜をうろついていたタヌキやハクビシンは、草むらに身をひそめる。遮るもののない広い空が、青一色に染まる。

朝が来ると、遠くまで見えるようになる。遠く、遠く……冷たい空気の中を、一人の老婆が歩いてくる。カーデイガンを一枚羽織って、一歩ずつ。一歩ずつ。

朝が来ると、何の音も聞こえない。夜、部屋の中は賑やかだった。ウーとうなるエアコンの音。ブーンと震える冷蔵庫の音。ヒーターの音。でも朝の散歩では何も聞こえない。

老婆は立ち止まり、耳を澄ます。こんな朝は、80年間この町を生きてきて初めてだ。こんなに静かなことがあるだろうか？ いくら田舎の町つつつても、昔は、朝は、いろんな音がしたもんです。煮炊きの音、新聞配達の声、朝早く出かける人の音。昔は……。

そういえば昔、かくれんぼをしていて、探しても探してもだーれも見つからなくて、世界中から人がいなくなってしまうんじゃないか！ ……そんなこと、考えたことあった。世界中、人が、一人もいない……。

朝が来ると、老婆は毎朝、散歩をする。彼女のかかどが、町に一つだけの音が聞こえる。